



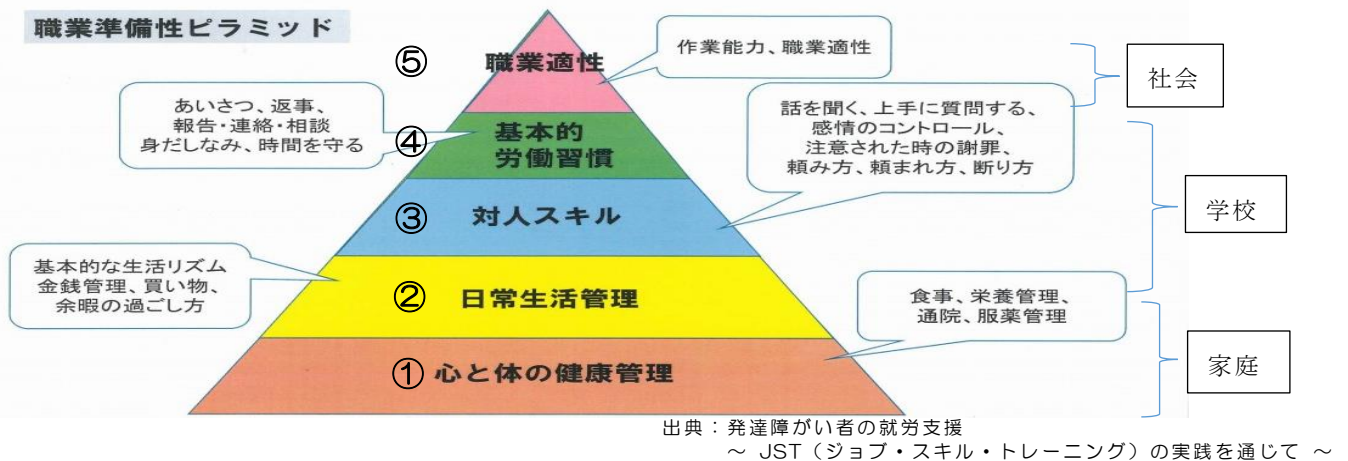
令和4年7月15日発行 文責：福田

【今回のテーマ】「職業準備性」「卒業後の余暇」について

今回は、働くための準備として、「職業準備性ピラミッド」、そして働くにあたって大切な「余暇」についてです。「職業準備性」という言葉は、就労移行支援事業の利用や企業就労を目指す際によく聞く言葉です。しかし、「職業」「働く」といっても、賃金が発生する労働に対してだけの話ではありません。本校高等部でねらっている「社会に出ても生き生きと一生懸命働く人になってほしい」や「社会の一員として人と楽しく社会生活を送ったり働いたりすることができるようになってほしい」という観点から「今」「日々」何ができるのか考えていきましょう。

◎職業準備性について

働くための準備



職業準備性には、「健康管理」「日常生活管理」「対人スキル」「基本的労働習慣」「職業適性」という5つの資質があり、これらを階層別に整理したものが「職業準備性ピラミッド」と呼ばれています。

「職業準備性ピラミッド」は①から順番に基礎的な資質で、積み上がっていることが重要です。ここでは、ピラミッドを構成する5つの資質について、具体的な内容をご紹介します。

① 心と体の健康管理

自身の障害について正しく理解し、働くことの基盤となる体調を日々しっかりと整え維持していくことを指します。つまり、「職業準備性ピラミッド」でいう「心と体の健康管理」とは、単純に規則正しい生活をするのではなく、**自身の障害を把握して周囲に配慮を求める力（苦手なことを伝えたり手助けを求める力）**や、**病気の予防や早期治療に努めて健康を維持する力**が備わっているかということになります。

② 日常生活管理

規則正しい生活をし、地域社会などの利用可能な地域の資源やサービスをうまく活用して生活を営むスキルのことを指しています。**規則正しい生活は仕事を継続していく上で、必要となる力**なのです。また、家族からの支援だけではなく地域のサービスなどを活用することで、生活が楽になるということもあります。

このように「日常生活管理」には、**自立して生活するために地域のサービスを上手に活用する力**も含まれています。

③ 対人スキル

職場での対人関係は非常に重要となります。働く上では、**どんな人とも円滑な人間関係を構築していくスキルが必要**となります。また、自分の障害についての説明やサポートの依頼、環境の調整等について求めなければならないことが少なからずあります。お互いが不快になることなく、意思疎通を図ることができるような**コミュニケーション能力が必要**となります。

④ 基本的労働習慣

専門的なスキルの前に**基本的な労働習慣を身につける必要**があります。「基本的労働習慣」とは、挨拶などの社会人としての**基礎的なビジネスマナー、報告・連絡・相談の習慣付け、社会や組織で守るべきルールの遵守**などのことを指しています。

⑤ 職業適正

「職業適正」は、企業や福祉サービス事業所の仕事内容によって異なる場合も多く、**事前に準備することは難しいスキル**です。**作業能力の自覚（適正・量）・作業速度・効率の向上・指示理解・作業の正確性・作業環境の変化への対応**などが該当します。

◎卒業後の「余暇」について

心から楽しめること、好きなこと、没頭できることを一人で楽しんだり、仲間と共有できたりして過ごすことができれば、何よりでしょう。好きな何かはあるでしょうか？あるようでしたら、大切にしておいてください。まだ…今現在では…というお子さんも、きっと本人が興味関心のある何かがあるはず。見つけ（気付）けていけるといいですね。ご参考までに、以下、就労の定着や継続を図る法人向けの障がい者雇用サービスが出している記事や研究論文より抜粋したものを掲載致します。

さて、「余暇支援」という用語があります。障がい者の生活の質（QOL）を向上させるために必要不可欠な要素です。生活の質を保つことにより、社会参加、就労の質も共に向上することに繋がる重要な要素として、徐々に認識を得始めています。ただ、社会的に、完全に浸透し、理解されている状況とは言えません。

一般的に「余暇」というと、暇な時間、持て余した時間、単なる休暇・休息というイメージの強い言葉です。しかし、本来「余暇」とは、就労の時間を充実させるために、自分自身の能力の向上、想像力を養うための時間、精神的、肉体的疲労の回復に充てる「就労のための準備の時間」です。余暇支援の活用により、本人の喜び、やりがい、好奇心の拡大に繋がり、「自己実現」を通じ、就労の質の向上を図ることができるのです。

多様化する社会の中で、それぞれの人は一方向的な想像によって理解される存在ではなく、得手不得手の部分や個々人の個性を理解し、特性を生かしていくという時代です。余暇支援のレクリエーションやスポーツを通じて、「息抜き（張り詰めた神経の緩和）」「コミュニケーション能力の向上」「運動による体力向上」などの効果・成果が得られるという研究結果が発表されています。もちろん、効果・成果のために余暇活動をするのではなく、効果・成果は余暇活動をした結果であります。

余暇支援を利用されている方が、余暇支援の無い休日にはどのように過ごすかというアンケート(2009)では、「寝て過ごす」「母親と過ごす」「テレビを見るだけ」などの回答が多いのが現状のようです。19歳以上の利用者が希望する活動内容では、No. 1が「料理」、続いて「日帰り旅行」「運動」というデータ(2009)があります。また、保護者が余暇支援に求めるものでは、No. 1が「自立」、続いて「交友関係」「興味関心」「コミュニケーション」「気分転換」「家庭ではできない活動」となっています。長期的には、「将来を見据えた余暇支援」「送迎や料金などの負担が少ないものを継続」「家族以外の人との関りや体験」を大切にしていきたい傾向であるようです。(2013)

また、福祉的就労（就労移行支援・就労継続支援A型・B型、地域活動支援センター、生活介護一部）での事業所内での余暇支援の現状については、「目的的な余暇支援より自由度の高い活動となっている」「福祉的就労の場における余暇支援の導入は制約がある」「QOL概念が普及している」という調査結果(2013)になっています。

*「株式会社 総合キャリアトラスト（SCG）」「岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第13号」記事参考

卒業、就労後のご家族での余暇の充実と併せて福祉サービスの余暇支援をうまく活用する選択もありそうです。